



Title	フィンランドの樹木とともに生きる世界：死者のカルシッコに見る「エラマ」の物語 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	田中, 佑実
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15065号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/85455
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yumi_Tanaka_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 田 中 佑 実

学位論文題名

フィンランドの樹木とともに生きる世界
—死者のカルシッコに見る「エラマ」の物語—

・本論文の観点と方法

本論文はフィンランドにおける「死者のカルシッコ」と呼ばれる風習について人類学的に明らかにすることを目的としている。カルシッコ (karsikko) はフィンランド語の動詞“karsia”（枝を切り落とすの意）を語源としており、「死者のカルシッコ」という場合、枝を切り落したり死者のイニシャルや生没年を刻んだりした樹木およびその風習を指している。そのカルシッコは、死者が出た家と墓場との間に立つ木々の中から選ばれた。従来のカルシッコに関する先行研究では、この風習の起源や機能に関心が集中し、ファン・ヘネップの通過儀礼論に依拠しながら人間が樹木に付与する機能（死者を墓地に帰す、もしくは家族が死者を思い出す）を解釈するに留まっていた。しかし実際に著者がフィンランドでカルシッコの現場を経験すると、人間が機能を付与する用具に留まらないカルシッコの樹木そのものの存在感を知ることになった。このことから、生者と死者そして樹木との3者関係においてカルシッコを捉えなければ、この現象を適切に研究できないと考え次のようなアプローチを採るにいたった：理論的には、人間を唯一の行為主体とする旧来の枠組みから、自然と文化との関係性に視野を広げる新しい人類学のアプローチを踏まえる。実証的には、アーカイブ資料の調査やフィンランドにおける人と樹木を巡る歴史的な文脈の検証に加えて、現代において死者のカルシッコを受け継いでいる家族の下でのエスノグラフィック・フィールドワークを実施する。この現地での経験と知見に基づいて、カルシッコという現象における生者と死者と樹木との関係性を明らかにすることが本論文の主要な問いである。

・本論文の内容

序論では死者のカルシッコという現象を提示しつつ、それが示唆する理論的な含意を指摘し、カルシッコにおける生者と死者と樹木との関係性を明らかにすることを通して、今日の人類学において問題となっている自然と人間の繋がりを論じるという、本論文の研究設問を導き出す。

第1章では、本研究を人類学における存在論的転回以後の理論的な先行研究の流れに位置づけ、「自然」と「文化」の二元論を問い直し、人間を他の生物種との絡まり合いの中で捉えようとするマルチスピーシーズ人類学といった研究動向をレビューする。「自然と文化」「自然と人間」を巡る人類学的議論における樹木は、生態的及び経済的視点から議論される場面が多かった。動物たちはその思考や認識について語られ、肉という側面からも人と動物や人同士の関係が明らかにされる一方で、樹木と人間との関係は、より物質的要素の強いモノという側面から人間の経済社会を動かすアクターとして記述されてきた。ここでは樹木をモノとしての存在に限定せず、生きて、他者との繋がりの中で影響力を持つ存在として示すことで、死者を含めた他者との関係の中でカルシッコの樹木を捉え直すことを目指す。この動きは植物学における人類中心主義の問い直しと軌を一にしているため、植物学における動向も紹介する。また、フィンランドにおける「自然と文化」「自然と人間」を結ぶ存在としてここでは死者に注目する。特にフィンランド語で「自然」を意味する「ルオント」は、同時に祖先である死者をも意味する言葉でもあり、自然と人間との関係を論じる上で、生者だけではなく、死者の存在をも考慮に入れる必要があること論じる。第3節では人類学における死と死者に関する研究について、儀礼の視点から記述する。

第2章では、フィンランドにおける宗教的世界観について記述することで、死者のカルシッコを理解するための文脈を示す。特に第2節で紹介する「超自然的」存在であるハルティアや第3

節で述べる捧げものの木は、フィンランドにおいて死者を含めた「自然と人間」が精神的にどのような繋がりの中にあっただかを知る手がかりとなるものである。

第3章では、カルシッコの風習に関するこれまでの先行研究をもとに、カルシッコの種類や形、風習の起源や担い手、風習の背後にある死後の世界と死者への観念を示し、アーカイブ資料を提示しながら、時代とともに変化してきた死者とカルシッコの樹木、生者の繋がりについて述べる。

第4章では、フィンランドの近代における産業と農業の発展に加え、今日の林業の様子を述べ、暮らしの中の林業や樹木及び森の保護の在り方について触れる。樹木は今日でもフィンランドの経済を支える重要な資源である。第4章では樹木を精神的繋がりとは異なる立場から眺め、より物質的な視点から樹木を描き出すが、そこにはどちらか一方には割り切ることのできない樹木と人間の繋がりが見える。

第5章ではフィールドワークの概要について説明する。

第6章ではフィールドワークを実施して明らかになった家族、樹木、死者、他の人々との繋がりを描きだしていく。これらの記述から現れるのは、人々の生活を基盤としたカルシッコの風習と樹木の行為主体性、そして生活を構成する様々な存在が互いに関係しあう現場の様子である。

第7章では、「自然と人間」及び「モノ」を巡る人類学的議論を踏まえ、死者のカルシッコの樹木を「人」または「モノ」と仮定して、風習において死者のカルシッコの樹木がどのような存在として人々の前に現れているかをアルフレッド・ジェルの理論枠組みを参照しつつ分析する。しかし死者のカルシッコの樹木は人間に近い存在として語られるとは言え「人」ではなく、また単に行為主体性のある「モノ」でもなかった。フィールドにおいて死者のカルシッコの樹木は人間や森の動物たちと同じように、生まれて、家族を作り、死んでいく「エラマ（“生”を意味するフィンランド語）」があると言われたのであった。

第8章では、現代においてカルシッコを受け継ぐ家族が述べる「エラマ」という概念を手がかりとしながら、カルシッコが現代の文脈において生者と死者と樹木とをどのように結びつけているのかを考察する。そこではカルシッコの樹木はその家族と共に生きる存在（エラマ）であり、モノとしての物質的側面だけでなく、より精神的な側面においても影響力を持っていることが見られた。生者にとってのカルシッコは死者をこの世から切り離すと同時に思い出を保つためのものであるが、その関係性は生者から樹木への一方的なものではなく、そこには樹木および死者から生者への影響も色濃く表れている。この現代のカルシッコの文脈において、樹木と死者は生者の生活の一部となって、生者の生（エラマ）を支えてもいる。ここでは、人間（生者）が一方的に自然を認識し、影響を与えるという構図ではなく、樹木（自然）－死者－生者の三者が互いに互いの一部となり、影響を与え合う関係性を見て取ることが出来る。

これまで述べてきたことを踏まえて、結論では、カルシッコにおいて見られる三者関係から従来の象徴人類学で言われていたような、人間に限定される社会の概念が、死者、自然にまで拡張されるということを論じている。そして「エラマ（生）」を含めた理論的枠組みが、人とモノとの関係性に関する人類学的な議論に対して持つ含意を考察する。